

マスク着用義務を撤廃した スイスの夏

マスク着用義務を隣国に先駆けて撤廃したスイスだが、クラスターは確認されておらず、国外から入って来るアーティストに病欠が多い。ヴェルビエ音楽祭ではマルタ・アルゲリッチ（P）がキャンセルしたため、藤田真央（P）が公演2日前に依頼を受け、無事代役を務めた。

ダヴォスではある富豪が、バンデミックの合間に90歳の前祝いをしてしまおう、とヨナス・カウフマン（T）とティアナ・ダムラウ（S）、そして南西ドイツ・フィルハーモニー交響楽団を全員招待してオペラ・コンサートを開いたほど、脱コロナの幻想を抱かせる夏だった。

サンクトガレンでは鈴木雅明、鈴木優人の親子がチェンバロ・リサイタルを行った。

ルツェルン音楽祭2022

ルツェルン音楽祭もマスクなしで8月9日に開催された。ヴァレリー・ゲルギエフ指揮マイリンスキー劇場管弦楽団とデニス・マツィエフ（P）の出演を音楽祭側から断つたため、2種のプログラムのうち1公演はルツェルン祝祭管弦楽団と首席指揮者のリツカルド・シャイーが代わり、ソリストに藤田真央を大抜擢した。

もう1公演は、チェチーリア・バルトリが芸術監督を務めるザルツブルク聖霊降臨祭音楽祭の去年の演目、モーツァルト《皇帝ティートの慈悲》（演奏会形式）に替わった（8月20日）。ここでもヴィテッリア役のアンナ・プロハスカが病気のため、マリオン・ハルテリウスが老眼鏡と譜面と共に健闘した。バルトリのセストは予想通りに主

役を張ったが、レア・デサンドレもアンニオ役であいかわらず実力を見せ、バルトリとの二重唱など至福のときだった。セルヴィリア

に適役だったメリッサ・ブテイとも声がマッチする二重唱を聴かせた。題名役のチャールズ・ワークマンは美声で声量もあり、テクニクもすばらしいのだが、母音が明るすぎるので滑稽に聴こえてしまう。しかし最後のアリアではようやくバランスが取れ、風格を見せた。ジャンルカ・カプアーノが結成した合唱「イル・カント・デイ・オルフェオ」はソロ歌手の集まりのような実力を持ち、カプアーノが指揮するレ・ミュージシャン・デュ・プランス・モナコも超速で序曲を走りぬけたが、うまく歌手陣を支えた。

8月27日は、今年のコンボザー・イン・レジデンスであるトーマス・アデスがアンネ・ソフフィー・ムターのために書いた「ヴァイオリンとオーケストラのための《Ari》」が世界初演された。2016年にアデス指揮するロンドン交響楽団と共演して以来のムターの望みがようやく実現したものだ。アデス率いるルツェルン音楽祭コンテポラリー・オーケストラはベール・ノルガルド《Dramme Op.1》とストラヴィンスキー《アゴン》でウオーミングアップし、休憩後にムターを迎えた。耳に残るような美しい旋律が繰り返され、オーケスト



アデスの新作を演奏するムターとアデス指揮ルツェルン音楽祭コンテポラリー・オーケストラ
© Priskaketterer / Lucerne Festival

ラのなかから生まれたヴィーナスのように、だんだんムターのヴァイオリンがきわ立ってくる。過剰なほどにヴァイブラートをかけて歌うフレーズが、突然ノンヴィブラートになり、あつげなく終わってしまった。もつと聴いていたかった。そのあとはルトスワフスキ「交響曲第3番」を自由に弾ききったルツェルン音楽祭コンテポラリー・オーケストラには、日本人二人をふくむアジア人が目立った。

8月17日は、シャイーも病欠でヤクブ・フルシヤに代わったり、ガーシユウィン《ボーギーとベス》でも配役の変更があったりしたが、8月28日のサンタ・チェチーリアのなかから生まれたヴィーナスのように、だんだんムターのヴァイオリンがきわ立ってくる。過剰なほどにヴァイブラートをかけて歌うフレーズが、突然ノンヴィブラートになり、あつげなく終わってしまった。もつと聴いていたかった。そのあとはルトスワフスキ「交響曲第3番」を自由に弾ききったルツェルン音楽祭コンテポラリー・オーケストラには、日本人二人をふくむアジア人が目立った。

8月17日は、シャイーも病欠でヤクブ・フルシヤに代わったり、ガーシユウィン《ボーギーとベス》でも配役の変更があったりしたが、8月28日のサンタ・チェチーリアのなかから生まれたヴィーナスのように、だんだんムターのヴァイオリンがきわ立ってくる。過剰なほどにヴァイブラートをかけて歌うフレーズが、突然ノンヴィブラートになり、あつげなく終わってしまった。もつと聴いていたかった。そのあとはルトスワフスキ「交響曲第3番」を自由に弾ききったルツェルン音楽祭コンテポラリー・オーケストラには、日本人二人をふくむアジア人が目立った。

しかし客席がリズムカルに拍手を贈るのに気をよくして、ブッチーニ《マノン・レスコー》「間奏曲」をアンコールに弾いたところ、本領発揮となった。やはりイタリア人の演奏法はオペラに合う奏法なのだ。チェロが切なく歌うメロディ、音程がぶら下がって聴こえるギリギリのラインまで音を引く張るヴィオラの色気、急速なデイミニユエンドは甘く、アッチェレランドでスリル満点、テンポの遅い部分も止まってしまいう直前までテンポを抑える。オーケストラ全体が歌手のようだ。そうしてパッパノーも大満足の終演となった。続きは来月レポートする。